



R18

酩酊した鷺沢文香が
若手芸人に輪姦される話

猪熊夜離

酩酊した鷺沢文香が若手芸人に輪
姦される話

酩酊した鷺沢文香が若手芸人に輪姦される話
3 ページ

鷺沢文香輪姦アフター
35 ページ

鷺沢文香。物静かな文学少女然とした居住まいとは裏腹に、ひとたび水着姿になるとEカップの隠れ巨乳が姿を現す第十代シンデレラガール。並み居るライバルたちを押しつけて見事に勝ち取った栄光の座。引っ込み思案でコミュニケーション能力に問題あった自分を変えたくて飛び込んだ新たな世界で、彼女はひとつの成果を出してみせた。

シンデレラガールになった文香には仕事の依頼が殺到した。中には「自分にできるだろうか」と躊躇う内容の仕事もあったが、何事も経験と前向きに捉えて飛び込んでいく。アイドルという仕事が彼女の外見だけでなく内面も磨いた。

本好きな文香は種々の仕事の中でも本に関する仕事を喜んで引き受けた。今日も民放のバラエティ番組で本を紹介する仕事があった。

読書好きな芸人が集まり最近のオススを紹介する体で番組は進む。バラエティ番組なので周りは芸人が大半。MCのツッコミも入って笑いを交えながら進む。

この雰囲気には自分は馴染めるだろうか、会話のテンポがズレてやしないだろうかと心配したが、そこは喋りが本業の芸人である。文香のゆったりした語り合わせた雰囲気を作り、彼女の話にも大きなリアクションを返してくれた。

プロの芸人さんは自分が話すだけでなく、他の人の話を引き出すのも上手いんだなと感心したものである。

「さっぎさっわさん」

収録が終わってスタジオから出ようとした文香は声をかけられた。そちらを向くと共演した若手芸人二人が立っている。彼らはコンビで昨年末の有名漫才コンテストに出場し、優勝こそ逃したもののファイナル三組に残って今年ブレイクした芸人である。

二人揃って有名な大学を卒業した高学歴芸人というのが売りのひとつ。経歴に恥じぬ読書家らしく今日の収録では二人とも鮮やかな弁舌を披露した。全国ネットのバラエティ番組である関係上、紹介する本は視聴者にも共感してもらえて、書店に行けば翌日すぐ入手できるタイトルという縛りがあった。

そのため彼らが紹介した本は文香も読んだことある有名なものだった。だが二人の話を聞いてると、そういう読み方もあったのかと目から鱗が落ちる思いがした。

確かコンビ名はトモキとケンジだったなと文香は思い出す。コンビ名に悩む時間あればネタを考えたいと自分たちの名前をそのままつけてしまった、いま思えばもう少し捻っておくんだった、後悔してると漫才コンテスト後のインタビューで語る記事を読んだ。

真面目な文香は共演者の予習もするのだ。

いま文香に話しかけた金髪ツーブロックがケンジ、横に立ってる派手な緑髪がトモキ。年齢は両名とも二十七歳。若手を名乗りながら三十歳越えてる人間も珍しくな

いお笑い界では若いが、現役大学生の文香から見ると、そろそろおじさん感が出てくる年齢である。

「……何かご用でしょうか」

やはり今日の収録で至らないところがあったのだろうか。やや構えながら文香はケンジに尋ねる。

「警戒しないでよ。難しい話じゃないから」

なあ？ とケンジは横のトモキに同意を求める。トモキも「そうそう」と頷いた。

「話題の文学アイドルと本についてもっと語り合いたくなってさ。このあと、ここに居る芸人連中で打ち上げするんだけど、もしよければ鷺沢さんも参加しない？」ケンジが言った。

「忙しかったり明日早かったりしたら全然断っちゃってくれて構わないから。噂どおり本に対する愛情とか熱意とかが凄くて。番組の縛りプレイで出せなかった本命のオススメについて語り合えたらなと思っただけ」トモキがケンジと文香を取り成すように言った。

さてどうしたものか。文香は内心で腕組みして考える。

せっかくのお誘いですし、お二人と本の話をしたい気持ちがありますが、帰宅が遅くなるのは……。

収録が終わって時刻は二十時を回っていた。生憎と普段なら一緒にプロデューサーが今日は別な現場に行っていて居ない。知らない男の人たちの中に自分だけぽつんは心細いし不安だ。

「鷺沢さんってお酒ダメなんだっけ？」思い出したとい

う風にトモキが言った。

「……はい。まだ十九歳です」

「それじゃ知らないおじさんたちと飲みに言っても面白くないよな」

「まだ俺はお兄さんだが」

「あきらめろケンジ」トモキは相方を諭すように言う。

「大学生から見た四捨五入三十歳なんて全員おじさんおばさんなんだ」

「そんなことはないです！」

文香は慌てて否定した。同じ事務所に彼らと同年代のアイドルが居るため、ここで「わかるわ」などと口が裂けても言えない。

「俺たちが大学生だったとき、まだ鷺沢さんはランドセル背負ってたんだぞ」

「冷静に言われると犯罪臭がするな」

八歳という年齢差を学年で例えると改めて離れてると実感したか、今度はケンジも同意する。

「俺らで最年少の集まりに若い女の子がひとりで来て楽しいわけないだろ」

「そうだな。ごめんね鷺沢さん。断りづらい誘い方しちゃって」

おや？ と文香は首を傾げた。やけにあっさり退くじゃないか。もっと粘られると思ったのに。

ひょっとして本当に本の話がしたかっただけなのだろうか。他意なく。

ぐいぐい押して、押して、押し倒す勢いで来られるこ

とも警戒していた文香は、彼らが自分たちから退いたことで肩透かしを食う。そして彼らの下心に対する警戒が少しだけ緩んだ。

その後やって来たのは、善意の人に疑いをかけた罪悪感と新しい読書友だちが増えるかもしれない期待。アイドルという未知の世界に踏み込んだことで人生が変わったように、交友関係を広げることで自分はさらに変わるんじゃないかという好奇心。

「あの……」文香は遠慮がちに口を開く。「やはり私もお邪魔してよろしいでしょうか」

ケンジとトモキは互いに顔を見交わした。

「もちろん歓迎するよ。トモキも嬉しいよな」

「鷺沢さんがよければ。一次会は二時間くらいで解散して、たぶん俺らは先輩に二次会誘われると思うけど、鷺沢さんはタクシー呼んで帰って全然だいじょうぶなんで」

じゃあ、そういうことで行きましょうかとスタジオを出た三人は二時間後、ラブホテルの一室に居た。

ベッドの上に紫陽花カラーの下着だけにされた文香が眠っている。彼女の両サイドにケンジとトモキも寝そべっていた。

「公式プロフィールによればバスト八十四センチだけ？ 絶対うっそだろ。もっとあるよ」

文香の左隣に陣取ったケンジが彼女の胸に手を伸ばす。ふにふにと乳揉みを楽しむ彼はパンツ一丁。

「この感触は八十八はありそうだな。アンダーが細かいか

らカップ数で言うとGか？」

反対側に寝そべったトモキも文香の胸を揉みながら話す。こちらもパンツ一丁である。

両胸を揉まれた文香は小さな声でうめきながら身をよじる。自分たちの手技に反応する艶めかしい姿に男たちは鼻の下を伸ばした。

「さすがシンデレラガール。至近距離で見ても可愛いわ」

言いつつケンジが文香の唇を奪う。酩酊状態にある文香の唇を軽く舐めると、舌を隙間にねじ込んだ。

くちゅっ、ちゅっ、ちゅううっつと水音を立てて舌を絡ませ吸い付いた。

「あっ、んっ！ あっ、ふっ……んう、んくっ……」

ケンジの舌使いに応えようと文香も舌を出す。ぎこちなく不慣れた動きに経験の少なさが表れていた。

「キャラどおり身持ちは固そうだな。これでえっぐいべロチュー返してきたら、それはそれで楽しみ甲斐があるけど」

「俺にも貸せよ」トモキが文香の顎をつかむ。相方から奪うようにして自分のほうを向けさせ、彼も文香の舌に自分の舌を絡ませた。

「あふ……んちゅっ……♡ はむう……♡」

意識混濁する文香は外界からの刺激に反射で応えてしまう。もし正気であれば二人とのキスなど拒否していたであろう。しかし明らかに尋常な状態でない彼女は、微かにアルコールの味が残る舌を美味しそうに吸ってしま

「はむっ♡ くちゅっ……ちゅるっ♡ れろっ♡ れ
ろっ♡ ……んっちゅ♡ ちゅるっ♡ じゅむっ
れろっ……じゅるるるるっ♡」

収録後に彼らの打ち上げ会場へケンジ、トモキとともに向かった文香。だが店に他の芸人の姿はない。

「先輩たち少し遅れるってさ。おじさんだから一仕事終えたら一服するまで動けないんだな。文香ちゃん先に何か頼んでよ」

スマホを操作しながらケンジがメニューを手渡してくる。

後で先輩たちが来るからと言って二人は文香の両隣に座った。肩と肩が触れ合う距離で異性に挟まれると緊張する。プロデューサー以外の男性と接近することに慣れてない文香は、誰も座ってないテーブル向かいの席を羨ましく思った。

距離が近いです。男性とこんなに近づくのは慣れませんね。

その後、三人はメニューを眺めて一通り飲み物と食べ物注文した。

「先に初めてていいから乾杯しようか」

ケンジの音頭で三人はグラスを軽くぶつけ合う。両隣の二人はビール、文香はウーロン茶で宴が始まった。

最初は慣れない状況で固くなったが、ケンジが本の話を中心に休みなく語りかけてくるため、それに答えるだ

けで会話が自然と成立する。トモキは相方に比べて口数こそ少ないが、話の流れを見て相槌を打ったり、話題を広げて切れ目ができないように誘導してくれる。

文香のほうも話していると徐々に彼らと打ち解けていくのを感じた。

ほぼ初対面の人と自分がこんなに話せるなんてと一番驚いたのは文香かもしれない。話題が大好きな本のこととあって会話にも熱が入る。

……そう、熱が入った。

「この店ちょっと暑いですね」

文香は手で顔を仰ぐ。先程から頬が火照って仕方ない。視界は油膜が張ったように濁り始める。良くない兆候なのでは。何か変なのでは。彼女の微かに残った理性が危険を訴える。しかし脳の大部分は麻痺しており真剣に考えることができない。

「隅の席だから熱がこもってるのかな。ほらウーロン茶ぐいっといっちゃって」

ケンジに勧められるまま文香はグラスに残っていた茶色の液体を流し込む。ゴクゴクとグラスを空にしていく彼女は、両隣に座る男二人が欲望にギラつく眼でアイコンタクトしたことに気が付かない。

ケンジとトモキは最初から文香を輪姦^{まわ}すつもりで仕組んでいた。他の芸人も来る打ち上げと称して個室居酒屋に誘い込む。両隣を確保するとケンジが常に話しかけて引き付ける。グラスから注意が逸れたところでトモキが少量ずつ文香の飲み物にクスリを混ぜていった。

飲ませると脳の思考を司る部分が麻痺して泥酔したようになる。理性が後退して本能が剥き出しになるので気持ちいいことに弱くなる。感度が上がった体は軽く触ってやっただけでイケるまで出来上がる。

欠点は飲み物に混ぜても隠せないくらい苦いこと。一度に全量を投入すると気づかれる。そこでコンビ芸だ。ケンジが文香の意識を自分へ向けてる間に、トモキが数回に分けて少しずつクスリを混入する。

違和を感じない程度の量から始めて徐々に脳を黙らせる。グラスの中身が舌を刺すほど苦い液体に変わるころには、何ひとつ真剣には受け止められなくなっている。

「そろそろ効いてきたな」ケンジが言った。

「鷺沢さんだいじょうぶ。ここどこ分かる？」

トモキの問いかけに文香は焦点の合っていない目で答える。

「完全にトランス状態入ったな」トモキはテーブルの上からビールが入ったジョッキを取る。文香に持たせると彼女の口に運んだ。「撮れ撮れ。現役アイドルの未成年飲酒写真だ」

トモキが手を添えてジョッキを傾けると文香は為すがままに受け入れた。意識朦朧とする彼女は自分が何をさせられてるかも分からぬまま、口に入ってきた苦い液体を飲み干す。ただでさえクスリが効いてるところへアルコールの効果も合わさり、いよいよ文香は男たちに都合いい操り人形になる。

ケンジがスマホのカメラを向けて動画、写真で文香の

飲酒現場を保存する。今日これから起きることを振り返るとき、発端は未成年の文香が酒を飲んだことだったと原因をすり替えるためである。

「俺のカシオレも飲んでおこうか」

トモキが空になったジョッキを取り上げると、矢継ぎ早にケンジが自分の酒を文香に手渡す。

「文香ちゃんカシオレ美味しい？」

動画で残されてることも知らず文香は頷いてしまう。ここの部分だけ切り取られると文香が自分から進んで飲んだように見えてしまう。

「目がどこ向いてんのか分からないくらい飛んじゃってるね。頬もピンク色。完全に出来上がっちゃったね」

言いながらケンジが文香の耳を舐める。

「ふぁあぁっ！ あっ、あぁっ……」

文香が背を反らして悶える。大人しい文学少女に不釣り合いなデカパイが強調された。


「こうなると何されても気持ちいいだろ。キマった状態でエッチすると一生忘れられないくらい連続でイっちゃうから。今日一晩で何回イけるかな」

トモキも反対側の耳を舐めながら囁く。

「くはっ……はぁっ、あぁあんっ……だめ、だめえっ……んんっ！」

耳しゃぶりだけで軽イキした後、文香は両脇をトモキとケンジに支えられホテルに連れ込まれた。

彼らはシンデレラガールの肉体を堪能できる時間が一分、一秒でも惜しいと部屋に入るなり文香を脱がせる。



下着だけ残された彼女をベッドに乗せ自分たちは両サイドに寝そべった。

そして以前から気になっていた文香のおっぱいを揉みしだくことから始めたのである。

「すっげえやわらけえ」

ケンジが舌を絡めたまま文香の唇、胸の感想を漏らす。彼女の体はどこを触っても柔らかく、繊細で、甘い香りがした。永遠に触っていたくなる。結局のところ男が女体に求めるのは、男体にはない柔らかさなのだ。

文香はベッドの上で男二人に代わる代わるキスされる。悩ましい吐息を漏らして彼らに触れられる喜びを表す。いまの彼女には嘘がつかない。本心を誤魔化す発想がない。それゆえ文香の反応はすべて真実だ。

ケンジが文香のブラを捲り上げる。公称八十四センチ、トモキの揉んだ感触によれば推定八十八センチの乳房が顔を出す。生おっぱいの中心には控え目な持ち主の性格に反して大きめの乳輪。苺のように色づいた乳首はクスリの影響もあって軽い愛撫だけで勃起している。

「すげー綺麗じゃん」トモキが言った。

「美味しそうなおっぱい。いただきまーす」

ケンジが舌を出し文香の胸を味わう。雪のように白い乳房が体目当てのゲス男に汚される。唾液の跡が鈍く光った。

反対側も捲り上げてトモキが乳房を指で撫でる。鮮烈に色づいた肉丘をなぞられて文香の息が上がった。

「あっ♡ あっ♡ んっ、ふぁあっ♡」

「乳首ピンピン。気持ちいいんだ」トモキが素直に反応

する文香の肉体を挿入する。

トモキとケンジは左右から同時に文香の乳首に吸い付いた。口の中で木イチゴのような実を舐め転がす。

「ああんっ♡ あっ、あっ♡ んんっ、あっ、ひゃああんっ♡♡」

微睡みに沈む文香は女遊びに長けた二人のテクに抗えない。二人の男から同時に責められる経験などしたことなかった。未知の快樂に流されて休みなく嬌声を上げさせられる。

ここに居るのは第十代シンデレラガール……大勢の人間に憧れられ、仰ぎ見られるアイドルではない。ヤリチン二人にいいように扱われる経験人数ひとり、それも最近やっと卒業したばかりの半処女十九歳の女だ。

トモキは文香の手を掴むと自分の股間に誘導する。ステージ上ではマイクを握り、ファンに歌を届けるアイドルの手。そこに勃起したちんぽを握らせる。マイクを疑似男根に見立ててフェラや手コキを連想し、日夜シコシコしてきた文香推しのファンを嘲笑う行為。

お前たちが妄想するばかりで決して実現はできないことも、俺たち芸能界側の人間なら可能なのだと嘲笑する。

握らせるだけでなく手を上下に動かし、パンツの上から扱かせる。布の摩擦があるため快感に百パーセント集中とはいかないが、全国のおたくくんたちが妄想しつつ自分の手で扱くしかなかった鷺沢文香の手コキ——妄想の中でなら何百リットルもの精液を搾り出した手コキを

味わってると思うだけで、我慢汁が止まらない。

「俺も握ってもらお」ケンジも相方を真似て反対側の手を自分の股間に誘導した。

アンニュイな表情を浮かべ仰臥する文香の両手は、それぞれちんぽを握らされる。両手に茎状態で男に手を添えられ、下着の上から勃起した男根を扱いた。

「どう？ 俺たちのちんぽ」

「……おっきい……です」

トモキの卑猥な質問に夢見心地の文香は答えてしまう。

「文香ちゃんのおっぱいも大きいよ。そのままちんぽシコシコしててね。俺たちは文香ちゃんの乳首シコシコするから」

ニヤつきながら言うとケンジは再び文香の乳首にしゃぶりつく。反対側ではトモキが乳首を指先で弄りながらキスした。

「そんなにキス好きだっけ？」

「文香ちゃんの唇ぷるぷる美味すぎやべえ。お前もしろよ」

トモキが場所を譲るとケンジも再び文香と唇を合わせる。深いキスを繰り返しながら胸を揉む。

「ん……んんうっ♡ ふぶっ……んんん……♡ ちゅっ♡ ちゅぷっ♡ んんっ♡」

リップ音を立てて文香の体を味わう相方を余所に、トモキは文香の下半身に手を着ける。すでにショーツのクロッチ部分にはシミができていた。内ももや鼠蹊部、濡

れてる部分を広く手のひらで撫でるだけで文香は快感に悶える下半身を忙しく動かした。

大人しい女の反応を楽しんでいたトモキだが、濡れたおまんこを目の前にして撫でるだけで満足できるはずもない。下着をズラして姫割れを露出させる。

「こっちも綺麗だよ文香ちゃん。過去に抱いたアイドルは、汚いスポンサーのおっさんに股開きまくってグロマンだったけど、文香ちゃんは本当に清純派なんだな」

サーモンピンクの鮮やかな秘部を前にトモキは文香の貞淑さを称賛する。それをこれから穢してやろうとしているわけだが。

トモキの指が文香のクリトリスを撫で回す。敏感な肉の芽を刺激された彼女の声がひときわ甲高くなった。

「んっ♡ あっ♡ 気持ちいい♡ あっ♡ あっ♡」

「気持ちいいんだ。素直な文香ちゃん可愛いよ」ケンジが乳首を舐め回しながら言う。

トモキは濡れた陰唇を何度かなぞって中指に愛液を纏わせる。そしてゆっくり粘液に覆われた指を文香の膣内に差し込んだ。

「指するって入った。すっげーエッチ。もうヌルヌルだ」

その言葉どおりトモキの指はスムーズに出し入れされる。肉襞を指の腹で刺激しながらピストンする。最初は刺激に馴らすためスローペースだった動きが、問題ないと分かるやテンポアップ。速いピッチで膣内を耕す。

「んあッ、んい、いいんッ♡ う、そおッ……♡ そこだめえッ……♡ ああッ、あんッ♡ あんッ♡」

「俺にも文香まんこ触らせろよ」

相方の手マンで啼くアイドルの姿にケンジは対抗心を燃やす。俺のテクでもっと感じさせてやるとポジションチェンジを申し出た。

「うっわ糸引いてら。びっちょびちょ」

トモキが指を引き抜くと粘液の糸が文香の膣口との間に架かった。ラブジュースブリッジを切ると、トモキは文香の愛液で濡れた指を彼女自身にしゃぶらせる。口の中に突っ込んで彼女の舌に押しつけた。

「エロいな文香ちゃん。感度上がって気持ちよくなっちゃってるんだ」

すべては自分たちが盛ったクスリのせいなのに、文香の体がスケベだからいけないと揶揄する口調でケンジは言う。そして彼女の両脚を大きく開かせ頭を入れた。舌先で濡れた秘部に触れる。

ねっとり口をつけて舐め回しながら、手を伸ばして同時に乳首もつまむ。

「ちゅば、くちゅくちゅくちゅ、ちゅば、ちゅば、ずちゅ！ ちゅぼっ、はむちゅっ、ちゅうううん……」

「ひゃあ♡ ああ♡ んあ♡ それ♡ だめえ♡ あう♡ はう♡」

「ダメになっちゃうくらい気持ちいいんだ」

「ひゃ♡ だ、だめ……だめだめだめ……♡ それ、気持ちよすぎますからあ……♡ あっ、や♡ こ、これすき……♡ いい♡ き、きもちっ……いい……」

「もっとして欲しい？」

「……して、ください……もっと気持ち、いいこと……」
「オッケー……じゅぶっ！　ちゅううっ、れる……れるっ、ちゅっ、ちゅっ、んむうっ……」
「んっ♡　んっ♡　んっ♡　あんっ♡　いいっ♡　いいっ♡　もっとしてください♡」

今日初めてあった男におまんこを舐められながら、文香はもっともっととおねだりする。控え目で対人コミュニケーションを苦手とする性格に隠された、エッチな体を持って余す年ごろの本性が露わとなる。

「文香ちゃんみたいな大人しい子のほうが意外とむっつりスケベなんだよ」

トモキは片手で文香の胸を揉み、反対側の手で彼女の耳をマッサージする。そうして快感のために開いた口に自分の舌を捻じ込んだ。

「エッチなこと興味ありませんって顔した女のほうが、一度これ覚えると猿みたいに盛っちゃうんだよな。今日一日で気持ちいい本気キスも、おまんこ舐められる好きも教えてあげる。全部覚えて帰って酔いが覚めてからも俺らとセフレになろうよ。こんなにスケベな体してるんだから、いっぱいエッチなことしなきゃ勿体ないって」

好き勝手なことを言いながらトモキは文香の口内を蹂躪する。意識朦朧とする彼女は流し込まれる唾液を啜り飲み、頷くことしかできない。

「んふっ♡　んふっ♡　んふうううっ♡　じゅるるるるるっ♡　んりゅっ♡　んぐうううううっ♡♡」

そのまま二人は文香の上下の口を十分ほども犯し続け

た。やがてケンジが「いいこと思いついた」と言って離れる。戻って来たとき彼の手は楕円形の卵型ローターを持っていた。

「文香ちゃんは彼氏とヤルときも正常位しかしなさそうだし、大人のおもちゃなんて見たこともないだろ。これも大人になるための勉強ってことで」

ケンジとトモキは二人がかりで文香の体を裏返す。うつ伏せにさせて尻だけ持ち上げた。

「ほらほら当てちゃうぞ」

モーター音を響かせながらケンジはローターを文香の膣口に近づける。横からトモキが彼女の下着をズラしてサポートした。ベッドの上でも見せる息の合ったコンビ芸。たとえ文香に意識があったとしても、ホテルに連れ込まれて成人男性二人が相手では力尽くで抑え込まれていただろう。

敏感な粘膜に振動するおもちゃを当てながら二人は文香の尻を揉む。

「あんっ！ やっ！ 止めてっ！ 止めてえっ！」

ケンジの推測どおり文香は大人のおもちゃを使ったことがない。プロデューサーに処女を捧げるまで、自分に人並みの肉欲が備わってる自覚もなかった文香である。オナニーでもアダルトグッズの類など触ったことない。

未知の快楽に文香の体は驚き、怯え、躊躇いつつも、それらを肉悦が上回っていく。顔をベッドに押しつけ、尻だけ突き上げた体勢で下半身をガクガク震わせながら啼いた。

「あーっ！ ダメっ！ ダメえっ！ こんなっ！ あ
あんっ！ あっ♡ あっ♡ んああああっ♡ だめっ♡
あっ♡」

もちろんダメと言われてやめるような男たちではない。ケンジは手を左右に小刻みに振ってローター刺激を続ける。トモキは文香の尻たぶを舐め回した。

「すげえ。めっちゃ反応してんじゃん。これだけ悦んでもらえたら臨時出費も浮かばれるわ」

ケンジはローターの強弱スイッチを最大に入れる。モーターがうなりを上げて振動する。手を放せばそのまま飛んで行ってしまいそうなパワーを感じた。

「挿れちゃおっか」

ケンジは空いてる手で文香の割れ目をくばあと開く。限界まで広げたクレバスの奥に男を待ちわびて濡れ光る肉のヒダヒダが見えた。だがまだ肉棒は挿入しない。最大パワーで振動するローターを狭い入り口に押し込む。

「あれ入らないな」

「狭いの？」

苦闘するケンジの手元をトモキも横から覗き込む。

「キッツキッツ。挿れようとしても押し返される」

「締まりに期待できるな。ちょっと強引に押し込んでみようぜ」

男たちは力任せに文香のこみち小径を開こうとする。

二人は知らないことだが、卵型ローターの直径はプロデューサーの亀頭よりも大きい。これまで文香が受け入れたことある最大サイズがプロデューサーであるから、

まさしく彼女にとっては未知との遭遇である。

もし意識があれば、そんなもの入らないと大騒ぎして
いたであろう。

しかしクスリの効果で脱力する文香のおまんこはよく
広がる。入り口での抵抗も男の腕力には敵わない。充分
に濡れていたこともあり、最後はにゅるっとローターを
呑み込む。

生まれて初めて挿れられた大人のおもちゃ。人間の体
では不可能な責めを可能とする微細な振動に腹の内側か
ら揺さぶられる。初めて尽くしの体験に文香はシーツを
固く握りしめて悶え啼き叫ぶ。

「はあああぁんっ！ あああっ……あああっ……だ
め……そんなに掻き回されたらっ……ああッ……ああ
あっ……」

体を海老反りにして乱れ狂うシンデレラガールの姿
に、トモキとケンジは獲物を甚振る笑いが止まらない。

ホテルの一室に女の啼き声と男二人の笑い声、そして
腹の中から聞こえるくぐもったモーター音が響いた。

「それじゃ俺からも文香ちゃんにプレゼントしようか
な」

言うとは今度はトモキがベッドから離れる。戻って来た
彼の手は自販機で買った電マを握っていた。家電量販店
で売ってるマッサージ目的の電マよりも一回り小さい。
握り手がピンク色の可愛らしいデザイン。最初から性玩
具として使う目的で作られた電マだ。

先ほどと場所を交代してケンジがサポート役に回る。

文香の尻たぶを両手で大開にした。そこへトモキが電マを押し当ててスイッチを入れる。

「は、はげしっ♡ はげしい、激しいっ♡ んおお♡
ンおお♡ これっ、これっ、あああっ！ ダメッ！
ダメッ！」

膣内をローターに搔き混ぜられ、同時に外からは電マを押し当てられる。陰唇や膣口、会陰部に激しい振動を加えると文香の尻が淫らがましく上下に動いた。くびれた腰をくねらせ、大きな胸をベッドで押し潰しながら玩具責めに身悶える。

「電マ強く押し当てられるのが好きみたい」

「女の子を悦ばせてやるなんて俺ら優しいな」

小さい電マは大きい物より当て方が難しい。よりピンポイントにツボを狙う必要あるのだが、使い慣れたトモキには何のハンデにもならない。アイドルのクリトリスに絶好の角度で電マを押し当てながら、ベッドとの隙間に手を差し込み胸の柔らかさも堪能する。

文香は、ひくつくアナルもローターを丸呑みしてリモコンの紐だけ吐き出してるヴァギナも見られながら、人間の体をほぐす目的で作られた機械に陰部を揉捻された。

「俺らのちんぽ大きいから、おまんこしっかりほぐして挿れようね」

「あっ♡ あっ♡ い、い、イイ……ンンン♡ あっ、
あっ、あっ♡ ア~~~~ン、ハア♡ ハア……
♡ ああ……♡」

その後もトモキの電マ責めは続いた。途中で潮を吹いてもやめてもらえず、文香はイキすぎて呼吸困難になりながら尻だけは忙しなく揺らし続けた。

やっと機械責めから解放されたとき、文香の下着もシーツもバケツの水を引っ繰り返したように濡れていた。

3

「びちょびちょパンツ気持ち悪いから脱ぎ脱ぎしまし
うね」

ケンジが濡れた下着に手を掛け脱がす。抵抗できない
文香の脚からするりと引き抜いた下着をベッドサイドに
落とすと、べちゃりと重く濡れた音が立った。

背後に回ったケンジが文香の腰に手を掛ける。挿れや
すい位置に調節すると自分もパンツを脱いで陰茎を露出
させた。自慢のイチモツを背後から濡れた秘唇に擦りつ
ける。

「はあっ、あっ！ ……はっ、はっ、はっ」

ケンジのペニスはプロデューサーのモノよりも長大
だった。彼ではあり得ないロングストロークでガチガチ
に勃起したちんぽを何往復もさせる。長さを誇示する素
股だけで欲に溺れた文香のおまんこは際限なく濡れてし
まう。

「文香まんこも物欲しそうにしてるし……」ケンジの
亀頭冠が狭い入り口を押し広げる。「第十代シンデレラ
ガールのおまんこいただきます」

バックから赤黒い肉棒を差し込んでいく。ぬめぬめし
た肉の合わせ目は長時間のマッサージですっかりほぐさ
れていた。やっと来てくれた待ち人を手招くように肉襞
が蠢く。自ら異物を奥へ誘い込む動きで蠢いた。

「うっ……♡ あうっ……あ、あああぁっ♡ はあんっ

♡ あっ♡ ああああっ♡ あああああっ♡ ああああ
ああああああああ〜〜〜っ♡♡♡」

根本まで挿れただけで文香は背筋を反らし達してしまう。大きな目を快感に細め、眉間に深い皺を刻む。これまで経験したことがない大きさの異物に息苦しさで満腹感を訴える。プロデューサーとのセックスは常に初々しい正常位だった。初めて体験する獣の体位での挿入は文香の知らない場所に当たる。なけなしのセックス体験すら無効にされ彼女は処女のように混乱した。

「あっ♡ あっ♡ すごい……っ♡ すごおい♡ あう
っ……あっ♡ んっ♡ はあああんっ♡ あっ♡ ひっ
♡ ひいいい〜〜〜っ♡♡♡」

閉じた目とは裏腹に文香は口を大きく開ける。そうしなければ必要な酸素が取り込めない。だが大きく開かれた口からは吸い込んだ以上の勢いで酸素が消費される。最奥まで突き上げられ絶え間なく喘いでいるからだ。

ケンジがくびれた腰をガッチリ掴み、腰を律動させ始めると文香は狂ったように悶える。

「ふああっ♡ んんっ♡ んんっ♡ ああ、すごい！
すごく、気持ちイイっ♡ あああっ、ああっ、凄いっ♡
ああ、ああっ！ プロデューサーさんのと全然違う♡
かたくておっきい〜〜♡♡ ふああああっ♡ すご
いいっ♡ きもちイイですっ♡ きもちイイいいいい
いいっ♡ はあああっ♡ くっ♡ あはああああああ〜
〜〜〜っ♡♡♡」

快楽に素直になってしまうクスリを盛られ、初めての

ローター、電マ責めでトロトロにされた膣内を攪拌されては一溜まりもない。たとえ一部始終をプロデューサーが目撃したとしても、文香を糾弾することはできなかったろう。それくらい用意周到にデザインされた完璧な流れ。極上の雌を墮とすために何日も前から仕組まれた計画だった。

ケンジも夢中で腰を振った。

前戯に時間を掛けて焦らされたのは男も一緒だ。じっくり肉を仕込んでから挿れたほうが自分のモノに馴染んで気持ちいいと知ってるから我慢できたが、それでも何度か途中で切り上げて挿れてしまおうかと悩む瞬間があった。トモキが傍に居たためかろうじて我慢できた。

最初から一切の手加減なくピストンした。男の腰が女の尻を打つパンッパンッパンッという音が部屋に響く。濡れた肉を擦り合わせるずちゅっ、ぐちゅっ、ぬぷっという音が伴奏についた。糸引く本気汁を股ぐらから分泌しながら淫猥な音色に乗せて文香が悦びの歌を歌う。

「ひぁあッ♡ おくっ♡ 当たってッ♡ あんッ♡ ズッ♡ 当たったことない場所に届いてますっ♡ んほお♡ しきゅうにいい♡ おくう♡ おくう♡ あッ♡ あッ♡ あッ♡♡♡ あッ♡ 奥いい♡♡」

「文香ちゃん事務所の人間とできてるんだ。売り物に会社の人間が手を出すなんて大問題だろ。プロ意識と倫理観に欠けるスタッフが居たもんだ」

いつの間にかトモキがスマホのカメラを文香に向けていた。彼女の顔を至近距離から動画で撮影する。カメラ

から逃げる選択肢も思い浮かばない文香は、ちんぽでマン肉を捏ね回されて感じてる様子を撮影された。

「せっかくシンデレラガールに選ばれて芸能生活これからなのに、バレたら文香ちゃんのアイドル人生終わっちゃうかもね。彼氏くんもクビかな？ 会社には残れたとしても左遷だろうね」

トモキが文香の罪悪感を呷る。この部屋で起きたことを他言したら全員終わりだぞ、事務所の偉いさんに泣きついて俺らをどうしようってなら、こっちは自爆覚悟でやってやるぞ、その時は彼氏くんも道連れだぞと脅しを掛けた。

「今夜ここで起きたことを文香ちゃんが黙っててくれれば何も問題はないわけさ」ケンジがカウパーでぬるつく亀頭を子宮口にぶつけながら言った。「文香ちゃんさえ黙っててくれたら何も起きなかったことになるからね。俺らなんか言うわけないし。シンデレラガールの鷺沢文香ちゃんが、レイプちんぽで善がり狂う変態マゾ女だったなんて」

文香の自尊心を打ち砕くようにトモキとケンジが声を合わせて笑う。そんな扱いをされても文香は快樂に大波に逆らえない。自ら背後のケンジに尻を押しつけ少しでも奥まで突いてもらおうとする。知ってしまった自分の体の本当に気持ちいい部分……プロデューサーのちんぽでは届かなかった弱点にレイプちんぽを迎え入れた。

ピストンに合わせて過激に弾む乳房をトモキが手で掬う。

「おっばい、ぷるんぷるん揺れてる。本当にいやらしい体してるよな」

「トモキはおっばい星人だもんな。俺は尻派。こうやって後ろからパンパンすると、ちんぼも気持ちいいけど尻肉の感触がまた」

トモキに乳首をキュッと摘ままれ文香の膣洞が縮まった。ひくひくと狭い肉筒を収縮させ、ちんぼに濡れた肉を巻きつける。膣全体で媚びて男の射精を誘った。

「おお、あああ！　すごいです！　気持ちいいですうッ！　ひいッ！　ああっ！　もっと！　もっと激しく突いてっ！　ああッ、あああッ！」

「文香ちゃんのナカ具合よすぎて俺も限界だわ。一発出しておこ」

「早すぎじゃね？　早漏かよ」

「そんなこと言えるのは体験してないからだって。油断してると吸い尽くされるぞ」

ケンジがピストンのペースを速める。フルピッチで子宮を突き上げ射精欲を昂ぶらせた。

「あっあっあっ！　やっあっ！　いくうっ！　またいくっ！　あっあっあっああっ！」

「イっちゃおうよ文香ちゃん。俺が出したら一緒にイッてね」

「ああっ♡　あぐっ♡　ああっ♡　ああっ♡」

ケンジが文香の両腕を掴み引き起こす。上半身が持ち上がったぶんだけ下半身の密着度合いが増した。身を焦がす肉悦に彼女は目を強く瞑る。一緒にイケと言われた

ことへの首肯か首を縦に振りたくった。

「イッ、イカせて……くださいっ♡ 一緒にっ！ ああっ♡ 一緒にイカせてえっ！ お願いっ♡ ああっ♡ んっ♡ ふっ♡ ふっ♡ くうっ♡ あうっ♡」

内ももに力を入れ、隘路をさらに狭めながら文香は腰を跳ねさせた。人生初バックで頭が真っ白に燃え尽きるほどの快樂にイキ果てた。

「あっ♡ あっ♡ あっ♡ あっ♡ あっ♡ イク♡ イク♡ んっおっおっおっおっおっおっおっおっおっおっおっ♡♡♡ ああっ♡ イくっ♡ いっくっ♡ イぐっ♡ あっ♡ あああっ！」

ケンジが両手を離すと支えを失った文香の体はベッドに倒れ込む。手で庇う気力もなく顔面からダイブした彼女をトモキが仰向けに引っ繰り返した。

「今度は俺の番だからよろしく」

短く告げて正常位で刺し貫く。

「あうっ！ ああっ！ またっ！ またキちゃうキちゃうキちゃうキちゃうキちゃうキちゃうキちゃうキちゃうキちゃうキちゃうキちゃうキちゃうキちゃうきちゃっ——！」

まだ絶頂の余韻も覚め遣らぬ、うねり狂った蜜壺に二本目のちんぽを挿れられると、文香は強すぎる快感から逃れようとベッドを頭のほうに這いずる。無論そんなことをトモキが許すはずもない。自分から逃げようとした女の腰を掴み、お仕置きと称して鬼ピストンする。

「んひいいいっ！！ あっ？ あああっ！ イくっ！ イクイクイクイクっ！ ああああっ！ イックうう

っ！ イっひゃううっ！」

もはや普段のひとり静かに本と語らう鷺沢文香の面影はなかった。理性を失い獣に成り下がった彼女は、ちんぽの動きに合わせて嬌声を上げ、体をくねらせる人形でしかない。男に都合がいい生おまんこ付き美少女人形。男たちの欲望を受け止める偶像^{アイドル}。

「文香まんこマジで最高だわ。ちんぽだけローション風呂に浸けてる感じ？ 入り口はキツいのになカはまったりしてて甘やかしながら射精ねだってきやがる」

「俺が早漏じゃないって分かったろ」

「くそっ！ イッばかりだから余計に膣内が活発に動いて搾り取られる」

トモキは首筋に青い血管を浮かべて腰を振る。奥歯を噛みしめて快感に抗いつつ、ぬめぬめした肉襞を押しつけて子宮に亀頭を押しつけ、出っ張ったカリでナカを引っ掻く。想像以上の天国にちんぽが根本まで蕩けそうになる。早くも陰囊が切なくなり前立腺が収縮した。

それでも負けてなるものか、ここで退いたらいけない、むしろ前に出ねばとトモキはピストンをスピードアップさせた。イッた直後に挿入されて文香のほうを感じてるはずなのだ。自分が苦しいときは相手も苦しい。根性の見せ所である。

「んっ！ んっ！ くっ！ ああっ！ このおちんちんっ！ 奥ぐりぐり決ってくるっ！」

ずんっ！ ずんっ！ ずんっ！ と体全体を持ち上げるように突く！ 突く！

「ああっ！ 激しっ！ あん！ いいっ！ もっと！
もっと突いてください！ はああああああああっ！
おくっ、おくっ、すごっ、すごっ！ こんな初めてっ！
こんなの初めてなんですっ！ あっ♡ あっ♡
おくう、ズンズンくるうううっ！ あっ、おっ、お
お」

先にナカ出しされた精液を掻き出しながらトモキの肉棒が文香の蜜壺を出入りする。

文香は近づく絶頂への心細さから、しがみつける対象を探して両腕を伸ばした。その腕を掴んで抱き起こすと、トモキは彼女を自分の膝の上に座らせた。ぐりっと子宮が最深部の繊細な場所をえぐる。

「あうっ！ はくうっ！ こ、壊れ！ んくう！ んくうっ！ は、すごっ！ 気持ちいいっ！ おくっ！ おぐっ！ すごっ！ すごいっ！ すごいっ！ すごいっ！ すごいっ！ すごいっ！ すごいっ！ おちんちんでこんなに気持ちよくなれたの初めてですっ♡ 好きっ♡ 好きですっ♡ 好きいいっ♡ もっとギュッてえ♡ ずっとっ♡ ずっとオッ♡ おちんちん大きい男の人が好きっ♡ お二人のこと大好きですっ♡」

トモキが投げ出したスマホをケンジが拾い上げ、この場面も撮影されてることに気づかぬまま文香は、デカチンに屈服宣言してしまう。

「俺も文香ちゃんのこと好きだよ。俺ともケンジとキメたようなラブラブ同時イキしようね」

文香の顎を掴んで有無を言わず口づける。一番深い

場所まで貫かれながらキスハメに文香は両脚をピンと突っ張らせた。

「んっ♡ んむっ♡ むっ♡ む〜っ♡ むむうっ♡
むっ♡ んんんっ♡♡ んむっ♡ むうっ♡ ふあっ♡
ふうううっ♡ んっ♡ んっ♡」

「イっちゃえ、イっちゃえ。大好きな大きいちんぽに奥トントンされながらキスハメでイクんだよ」

「あはあっ♡ んんっ♡ んんっ♡ おくっおッ♡ ン
んむう♡ んむんむんむっ♡ んふううううあぐむむん
んんんんんんじゅるうううう！ ふはっ！ 申し訳あ
りませんプロデューサーさん♡ アイドルなのに♡ お
ちんちんの大きさと男の人を選んでしまいました♡ プ
ロデューサーさんには教えてもらえなかった、本当に気
持ちいいセックスしてくれるおちんちんでイクますっ！
イクッ！ わたしイっちゃうッ！ いくっいくうっ！
はぁぁあ〜〜〜っ！」

文香は紅潮した顔を天に向け反らす。トモキの胸板との間で大きな乳房が潰れるほど彼に抱き寄せられる。汗ばんだ肌はよく滑った。コリコリに勃起した乳首が擦れて喜悦に彩りを添えた。

「あひい♡ はひい♡ んぐう♡ あひ♡ あんッ♡
ああんッ♡♡ あんッ♡ しゅごッ♡ ばッ♡ あッ♡
あッ♡ あッ♡ イクッ♡ イっちゃう♡ イキま
すッ♡♡ イグッ♡」

体全体がおまんこになってしまったように敏感だ。その状態では浴びるように本を読んで身に着けた語彙も役

に立たない。出てくるのは、自分に本物のセックスを教
えてくれたおちんぼ様を讃える舌足らずな称賛と、おま
んこイキます宣言だけ。

イキますと連呼する文香の膣内に熱い白濁液が流し込
まれた。ナカ出しちんぽが膣内で暴れる感触がトドメと
なり文香も法悦の極みに達した。

「んぎッ♡ ひぎぎッ♡ ああぁッ♡ イクイクッ♡
イクイクッ♡ イグッ♡ イグッ♡ イグッ♡ イク
イクッ♡ あッ♡ イクッッ♡ イクッッ♡ イクッイ
クッッ♡ いグイグイッ——あっ！ あっ！ あ
っ！ あっ！ ああぁ♡ いっ、イッた♡ おまんこ♡
♡ おちんちんでイキました♡ おまんこイッちゃっ
た♡」

鷺沢文香輪姦アフター

僕が346プロに入社して早いもので六年が経つ。最初の三年間は営業を、後半の三年間はアイドルのプロデュースを担当している。プロデューサー業はアイドルの傍で彼女たちが輝ける手伝いをする花形の職業だが、昔から女性に縁がなく気の利いたことも言えない僕は、自分より年下の女の子が多い職場でやっていけるか不安でもあった。

そんな僕に自信を与えてくれたのは担当アイドルの鷺沢文香。親族の経営する書店で店番をして過ごす大人しい少女に一目惚れして、彼女なら芸能界の激しい競争を勝ち抜いて一番のアイドルになれるとスカウトした。

人と接することが苦手が目立つことも得意でない彼女は初め、自分にアイドルなど務まらないのではとスカウトに難色を示した。長く伸ばした前髪で綺麗な顔を隠し、常に俯き加減で僕と接する彼女を見てると、性格的に向いてないことを無理強いする躊躇いが僕の中にも生まれた。

彼女が輝いてる姿を見たい、アイドルとしてステージに立ってる姿を全国のファンに見てもらいたい。それはすべて僕の身勝手なエゴの押しつけでは？ 彼女には単なる迷惑では？

それでも諦めきれずスカウトを続けたのは、彼女に大きなポテンシャルを感じたからだけではない。この時点で異性としても惹かれていたことを告白せねばなるま

い。

彼女との間に接点を持ち続けたかった。たまたま日常の一場面ですれ違い、別れ、二度と関わらない通行人Aでは我慢できない。文香の人生に僕という存在を介入させたかった。個人的な下心にアイドルを利用するなんてプロデューサー失格だ。

僕のプロデューサー失格な行いは、女の子と関わる大義名分に自分の肩書きを悪用したことだけに留まらない。

付きまとい一歩寸前のスカウトが実を結び、文香はアイドルになることを了承してくれた。僕と彼女は二人三脚でアイドル戦国時代と呼ばれる芸能界に挑んだ。確かに文香の控え目な性格は目立てなければチャンスもない芸能界ではマイナスに働くこともあったが、彼女は自分を変えようと少しずつ前に出る勇気を身に付けてくれた。

担当アイドルが頑張ってるのにプロデューサーが安穩としてられない。僕も文香の強みを活かせるジャンルは何だ、どうすれば彼女は輝いてくれると四六時中そればかり考えて行動した。

その結果、文香は第十代シンデレラガールに選ばれた。僕と文香の目標が達成された瞬間だった。もちろん彼女のアイドル人生は今後も続くし、これからもっと彼女はアイドルとして数々の成功を手にしていくだろう。しかし今日ばかりは喜んでもいいんじゃないか、手放しで祝福しよう。

祝賀ムードの浮かれた僕は、再びプロデューサーとして許されざる行いに出してしまった。担当アイドルに告白したのである。思いの丈をぶつける僕に文香は大きな目を丸くした。きょとんと瞬きも忘れて僕を見つめる。当然だろう。ただの仕事仲間としか思ってなかった異性が突然、お前のことを女として見てきたと言いだしたのだ。長い沈黙の間に僕は辞表の書き方を調べなきゃな、総務に言えば書式もらえるかなと考えた。

会社の立場に立って物事を考える。大ブレイクを果たし、今後どんどん利益をもたらすだろうアイドルと、一介のプロデューサーのどちらを残したいか。文香が選ばれるのは火を見るよりも明らかだ。

プロデューサーにセクハラされたと彼女が会社に訴え、僕を傍に置くのは文香の芸能活動に差し障りあると判断されたら、会社は辞職勧告か良くてアイドルと関わることがない部署への異動を命じるだろう。

優しい文香のことだ。自分のせいで僕がプロデュースの現場から外されたと思い悩むに違いない。そんなことになるくらいなら自分の身は自分で処そう。密かに覚悟を決めたときだった。

文香の唇が震えながら動いた。

「私も……私も、プロデューサーさんのことが……」

なんと文香も同じ気持ちで居てくれたのだと知った。二人で大きな目標に向かって行動してるうちに、彼女の中で身近で頼れる大人の人から、特別な男の人へと僕の存在は変わっていったらしい。

「どうでしょう。アイドルの目標を達成しただけでなく……好きな人と、両想いになってしまいました」

いいことばかり続きすぎて反動が怖いと照れ笑いする彼女が愛おしすぎて、僕は沸き上がる衝動と勢いのまま抱きしめてしまった。

僕たちの前途は洋洋。何も遮るものがなく開けてる。人生は何もかもが素晴らしく、上手く行く。その時の僕はそう思っていた。

だが最近文香の様子がおかしい。端的に言って僕から心が離れてしまってる気がする。それほど恋愛経験豊富じゃない僕でも自分のことなら何となく分かる。僕の男の勘が告げている。元カレに振られたときと同じ雰囲気だ、と。

理由は分からない。僕たちは何もかも上手く行っていたはずなのになぜ？

それでも僕たちならやり直せるはずだ。これまでどおり二人の問題を話し合っ、より良い状態に改善していれば文香の気持ちも戻って来るはず。だいじょうぶ。きっと上手くいく、だいじょうぶ。

文香は仰向けで寝たベッドの縁から頭だけを出す。逆さまになった彼女の視界を埋めるのは激しく揺れ動く男の陰囊。腰の律動に合わせて精子袋がべちべち顔を叩く。限界まで開いた口には陰茎が突っ込まれていた。

「んじゅううう……ちゅぽっちゅぽっ……♡ ちゅぽっ

♡ ペろお……♡ れろおっ～べろおっ♡ じゅぶ、
じゅぶ……じゅるじゅるう……ぐじゅるるる……っ♡
ずるるるるううう……っ♡」

頭に血が上る姿勢で口を使われると息苦しさも相俟って意識が朦朧としてくる。眼球が充血して目の前が黒く染まる。ぞんざいに扱われて体は苦しいのにそれが心地いい。柔道の寝技で頸動脈を絞められて意識を失うと、失神する瞬間は気持ちいいという話を本で読んだことがある。それと同じことが起きてるのかも知れないと文香は感じた。ふわっと体が浮き上がって体が解放される感覚を味わっている。

「トモキちょっと口から抜いてくんね。文香ちゃんの喘ぎ声聞きたい」

「もう少しで出そうなのに」

不満そうに言いながらもトモキは長いペニスを文香の口から引き抜く。唾液でコーティングされた赤黒い肉棒が口から抜けると、邪魔するものがなくなった気道は大量の酸素を取り込もうとする。しかし一度に深く吸い込み過ぎてしまい嘔吐いた。

「ぶぼっ！ ごぼっ！ んぶっ！ がぼっ！ げぼっ！」

しばらく咳き込んだ文香だが、それも長くは続けさせてもらえない。膣内に埋め込まれた卵型ローターが暴れ狂う。初めてトモキとケンジに抱かれた日に教え込まれた道具責めの悦びが忘れられなくて、二人と会うたび文香は機械姦を期待してしまう。最近ではローターを見た

だけで濡れてしまう有り様だ。

ただでさえお腹いっぱい内側から膣洞を押し広げるローターなのに、いまはケンジの指も一緒に文香のこみち小径を犯していた。最強に設定したローターを二本指で持ち上げ恥骨の裏側に押しつけられた。Gスポットの位置もへったくれもあったものではない。力こそ正義。人間の手戯では再現不可能な振動数で無理やり文香は性感を叩き込まれた。

「おっ♡ おっ♡ いひっ♡ いぎっ♡ いいっ♡
うおあっ♡ そんなに強くおへその裏側に押し当てられ
たらっ♡ おっ♡ おっ♡ また出てしまいますっ♡
女が限界まで気持ちよくなったとき出るおしっこ♡
大人のお漏らしっ♡ いひっ♡ いぎっ♡ いいっ
♡ うおあっ♡」

「すっかりローター遊びにハマっちゃったねえ。これすると百発百中で文香ちゃんのお漏らし見物できるから俺もだーいすき♡ この状態でクリも吸われたらどうなっちゃうかな」

ケンジがローターを膣壁に押しつけたまま、文香の股ぐらに顔を埋めてきた。濡れた舌がクリトリスに触れる。言葉に反して彼は激しく舐め回したり、吸い付いたりしない。ただ舌の中央を肉豆に触れさせているだけ。それで充分だった。

「おっ♡ おほっ♡ ほへっ♡ えはっ♡ おっ♡
おっ♡ ほおおおおっ♡ おおおおおおっ♡ や
っ♡ やだっ♡ やだやだやだあっ♡ あぐっ♡ きも

ち……よすぎて……かはっ！ いきができない……♡」

クリの裏側で震えるローターの振動は体表にも伝わる。舌は添えてるだけでもローターの微細な振動により勝手に擦りつけられた。

また知らないこと……私が知らない……気持ちいいこととしてくれてる……こういう使い方もあるんですね……プロデューサーさんも教えてくれなかったこと……いっぱいいっぱい教えてもらってる……。

「んっ♡ ほぉおぉっ♡ おおっ♡ おおおおおおおおお
おー————っ♡ おおおおおおおっ♡ ほっ♡
ほっ♡ ……んみゅっ！ んみゅっ！ ……んふっ！
んんっ！ んっ！ んっ！ んっ！ あ～っ！ ん
っ♡ んっ♡ ん~~~~~っ♡♡」

昂ぶる尿意に負けて文香の下半身が一瞬だけ緩んだ。その隙に出口付近まで殺到していた水分が勢いよく飛び出す。

「んんっ、んんんんんっ♡ あっ、くふっ♡ んくっ
～、あっ」

イキ潮が間欠泉のように水柱を立てた。文香はベッドの外まで放水しながら体をガクガク震わせ意識を手放した。

「やりすぎだって。文香ちゃんノビちゃったろ」

トモキが文学少女の細い手首を持ち上げる。手を放すと力なくベッドに落ちた。

「文香ちゃんの反応が可愛くてエキサイトしすぎたな。まあ挿れてるうちに目も覚めるだろ」

「気を失ってる女に挿れて何が楽しいんだか。俺は起きてからヤルから先にちんぼ擦って抜け」

「言われなくたって」ケンジは未だ文香の膣内で振動し続けるローターを引っこ抜く。「このローターがおまんこから出てくる絵面が好きなんだよな。鶏が卵産むときに似てね？ 穴が広がって一部が出てきて、きゅぽっと出産。あ～いつか文香まんこから俺の子供ひり出させてえ～～～」

「こんないい女相手に孕ませる気でヤラなかったら失礼だよな」

お互い愉悅に歪んだ笑顔を向け合う。極上の雌を快樂で手懐け、自分たちから離れられなくした雄だけが浮かべられる勝者の笑みだった。

ケンジは硬くなったちんぼを文香の蕩けた入り口にあてがう。ゆっくり腰を進めた。剛直が押し入ると膣肉が伸びて男のサイズに合わせる。ぐいっと根本まで容赦なく押し込む。

「あっ♡ あっ♡ い、いいっ♡ んんっ♡ んふうっ♡ いいっ♡ きもちっ♡ いいっ♡」

ピストンすると最初から文香は全身を戦慄かせ喘いだ。失神するまでローターで責められた体は、とっくに男を受け入れる準備ができていた。背中をぐんと反らした弓なりの姿勢で抽送を受け止める。

「文香まんこ今日もトロトロ。名店のオムレツくらい絶

妙な半熟加減でチン媚びしてくんぞ。おらっ！ そんなにちんぽ欲しかったか。こうやって突いて欲しかったんだろ。朝から一日、俺らのちんぽのことばかり考えてたんだな変態女。最高に可愛いぞ。絶対ガキ仕込んでやる」

文香の隘路は全体が蠢いてケンジの肉棒を奥へ、奥へ誘う。焦らすように浅いところでピストンすると腰をしゃくり上げてくる。子宮ファック希望ダンスを踊る文香の淫らがましい姿には、さしものヤリチンも興奮を掻き立てられた。

焦らして焦らして完全に堕ちた子宮へ本命の一撃をズドンと打ち込む。

「あああっ！」

急所を押し潰される衝撃に文香は嬌声を上げ、五指でシーツを握りしめた。

美少女が悶え苦しむ姿は何よりも男のちんぽを活気づける精力剤。ケンジはハンマーで殴るような強烈な打撃を与え続ける。

「はあ、はあ！ んはあ！ あっ♡ あっ♡ んん、んああ♡ おまんこお♡ 気持ちいい♡ おおお♡ んああ♡ あ、あ、はあ♡」

力強いピストンで目を覚ました文香が恥ずかしげもなく秘部の名前を口にする。男たちは彼女の口がおまんこ言うのを聞いたがった。そこがどうなってるかおちんぽ食レポと題して実況させるのが恒例のプレイ。いま

では文香も興が乗ってくると羞恥心を忘れて連呼するようになっている。

「あっ！ あっ！ あうっ！ 今日も大きいです♡ ケンジさんのおちんちん♡ んああ！ おっ！ おお！

おほおっ！ これで奥まで突かれると頭がビリビリ痺れて♡ ひい♡ ひっ♡ んっ♡ 何も考えられなく……くっ♡ ひぎいいいい♡」

「いっぱい本読んで賢くなってもちんぼには勝てなかったね。俺たちのちんぼ欲しさに愛しのプロデューサーを裏切る馬鹿なクソビッチに堕ちた文香ちゃんには、もう戻れる場所なんかないだよ。せいぜい気持ちいいちんぼで幸せに浸りな」

「んっ！ ふはぁ♡ すごっ♡ 熱くて硬い♡ こんなに♡ おっ！ 奥まで♡ おおおお、おお♡ うっ！ 先っぽの出っ張りが私のナカで引っ掛かって♡ カリカリカリ掻き筆られています♡ これありませんでした♡ プロデューサーさんのおちんちんにはっ♡ おまんこ肉ぞりぞりしてくれる溝なかった♡」

「ちっちゃいだけじゃなくて形も貧弱だったんだ。文香ちゃんかわいそ〜。読書が好きで大人しい控え目な女の子？ 本当の文香ちゃんは、気持ちいいことが大好きで自分から腰へコヘコさせてちんぼにマン肉擦りつけてくる女なのに教えてもらえなかったんだ。自分で自分の本性に気づけるほど気持ちいいセックスしてもらえなかったなんてかわいそう」

プロデューサーとのおままごとエッチを憐れむと文

香の体が大きく波打った。好きだった人との幸せな記憶、満足していたはずの日常を愚弄されても怒りは見えない。それは彼女も納得しているからだろう。二人がしてくれる本物のセックスに比べたら、如何にプロデューサーとの行為が生ぬるく形だけのものだったか。

ベッドの縁で身じろぎした文香の上半身がズルズル落ちていく。頭を床につけ、下半身だけベッドに残した体勢で、腰を限界まで反らせておまんこを突き上げられた。挿入の角度が変わって浅い場所の天井にも圧力が掛かる。ローターを押しつけられて失神するまで感じさせられた場所は依然として敏感。亀頭で刺激すると文香は整った顔を雌悦に歪ませた。

「はっ、お♡ いい♡ あうう♡ ケンジさんのおちんちん♡ すごい♡ おっ♡ おほお♡ こんな、こんなっ♡ くっ！ ううっ！ おっ！ おおお♡ おっ♡ いぐ！」

「おおっ♡ 射精るっ♡ 射精る射精る射精る射精るっ♡ 俺もイクぞ文香」

「あっ♡ ま、またイクっ、イクっ♡ プロデューサーさんより濃いザーメンでイっちゃいますうっ♡ あっ、あひっ♡ あ、あ、あああッ♡ んああ！♡ イク！♡ 私もイク♡ イクイク♡♡ んひゃああああ♡♡」

まるで恋人同士のように足並みを揃え、ほぼ同時に二人は達した。口に入れたら嘔めそうなプリプリの特濃ザーメンを文香の子宮に注ぐ。頭を下にした体勢で重力の力も借りケンジは一滴残らず最奥に流し込んだ。射精

の勢いで肉棒が跳ね上がるリズムに乗せて「孕め！ 孕め！」と念を送った。

両脚を抱え込んでいた腕を放すと文香の体がベッド脇に滑り落ちる。全身全霊でイッた彼女は身動きできず床に転がる。その体をトモキが抱きかかえてベッドに戻した。

「休んでる暇ないよ文香ちゃん。今度は俺の相手してもらわなきゃ」

仰向けの文香に覆い被さったトモキは、膣内射精ザーメンと女の愛液でドロドロの蜜壺に挿入した。

「は、あああ！ トモキさん、許してくださいっ！ 少しだけ……休ませて、ください♡ やっ、めえ、ああ、んうううッ♡ トモキさ……ふああ……トモキさん、トモキさん～～♡♡」

「そんな風に男を誘う甘え声出しておいてやめてもないでしょ」

トモキは文香の体を二つ折りにする。彼女の額と自分の額を突き合わせ、俗に言う種付けプレスで抽送を開始した。

「ちがっ！ 誘ってなんか……んはあっ！ や、やめてください、あっ♡ あっ♡ や、やめて……やめて、ください♡ 少しでいいから休ませて♡」

「文香は自分が呼吸してるだけでスケベ振りまいてるって自覚しな。そこに居るだけで男のちんぽイラ立たせる存在なんだから。そんな女に突っ込んでるのに止まれるわけないだろ。ケンジのザーメン掻き出して俺ので上書

きしてやる。文香が産むのは俺の赤ちゃんだ」

相方への対抗意識を燃料にトモキのピストン運動はスピードを上げた。フルピッチで腰を振ると宣言どおりカリ首に搔き出された白濁液がベッドに飛び散った。

いい女が居たら孕ませたい。言い逃れできない方法でマーキングしたい。たとえ苦楽を共にしてきた親友で相方の男でも雌の所有権は譲れない。トモキは膣奥まで一直線に貫けるよう文香の体勢を調節する。

「うふっ、んっ、ふう♡ あはあぁっ♡ お、おちんちん……わたしのお……おまんこお、ぐりゅぐりゅってえ……イッたばかりでまだピクピクしてるおまんこ……ふといおちんちんでかきませられてりゅう♡♡」

文香の腕がトモキの首に回る。高まった女の心細さが縋り付く相手を求めているのだ。自分に甘える女の柔らかな肉体を受け止めトモキの側からも文香を抱きしめる。お互いの体温を感じながら二人は下半身をくねらせた。どちらかが一方的に奉仕するだけでは不可能だった複雑な絡め方が可能になる。

「トモキさんっ♡ 奥！ おく！ おきゅう♡ 突いてください！ 子宮にグリグリ当たって♡ おほっ、おおっ……おちんちんっ、しゅごっ♡♡ んあぁーっ♡」

トモキはピストンを一休みして子宮頸部に押しつけたまま腰を上下にしゃくる。亀頭冠でコリコリ、ぷにぷにの子宮を味わう。生で挿れたちんぽが子宮の入り口を

引っ掛けるたびに文香の体が痙攣する。

ころんころん子宮を転がし、甚振り、嬲ると文香の両腕に込められた力が強くなる。背中に爪を立てられる。鋭い痛み。だが悪くない。それだけ目の前の美少女を性的に悦ばせてやってる証明だ。虫も殺せなさそうな少女が抱きついた相手の体を気づかう余裕もないくらい感じてくれている。ベッドの上でなら背中の傷は勲章になる。

「あっあっあっ♡ もうダメっ……もう、イキます……」

立て続けに責められた文香は早くも降参宣言。イカせてくれと抱き潰されながら懇願する。

「あ、ああ！ だ、ダメ！ もう、もう、だめ！ 私、もう！ ああっ！ やめないでくださいっ♡ 続けて♡

このまま奥をイジメて♡ ぴったり押しつけてナカで出してください」

引き返してしまうよりゴールするほうが早いと考えたか、先ほどまでやめてくれと言っていた文香が今度はやめないでと意見を変える。

望むところだ。

トモキは僅かに両脚を開いて踏ん張る。フィニッシュに向けた本気ピストンで文香に腰を叩きつけた。

「ふあっ！ んっ！ はげし♡ ああっ！ いくっ♡
いくっ♡ 男らしいピストンでイカされてしまいますっ♡
ふああっ！ あっ！ ああっ！ いいっ！ もっと、もっと♡ 激しく、おまんこ壊れるまで、お腹突き破るくらい突いてくださいっ♡ あんっ♡ そこっ♡

気持ちいいっ♡ もっとしてえっ♡ もっと強くしてええええっ♡♡」

本来とても生殖器はデリケートなもの。少し乱暴にただけで傷ついてしまう柔な存在で、大切に扱わなければならない。それなのに文香はプロデューサーの女体を気づかったピストンより、トモキとケンジの乱暴なピストンからより大きな性感を得てしまう。

彼女自身も知らなかったマゾ雌の資質がデカチン二人とのセックスで引っ張り出された。

息もできないくらい強く抱かれて悦ぶ文香の肉体が限界に近づく。腕だけでなく脚もトモキの腰に回す。足首をロックして解けないようにした。万が一、奥が一、兆が一トモキの気持ち途中で変わってナカ出しを中止したくなくても逃がさない、絶対おまんこに精液注いでもらうんだという覚悟のだいしゅきホールドである。

無論そんな心変わりを孕ませる気満々で抱くトモキが起こすはずもない。彼は膣奥に押しつけるようなピストンで尿道まで迫り上がってきた精液を先端に向けて搾り出す。

「ああっ♡ イイっ♡ いいっ♡ すごいっ♡ トモキさんのおちんちんっ♡ すごい、すごいいいいいー——♡♡♡」

自分に雌の悦びくれたちんぽへの賛歌を高らかに歌い上げると、文香は絶叫が尾を引いたままオルガスムスまで駆け抜けた。

「あぁ～～♡ あ～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

~~~~っ♡ あっあ〜〜♡ あ〜~~~~♡ イ  
グう♡ いっ、いくっ♡ イっちゃうっ♡ もういく  
ううんっ♡ イクうううううっ——♡♡♡」

登り詰めたショックで文香の膣内が今日の締め付けを見せる。昂ぶりちんぽを肉褌ロールに搾られてトモキも限界を迎えた。

びゅばっ！ びゅるるるっ！ と男性器の先端に切られた割れ目から白濁液が飛び出す。相方が先に射精した精子を押しつけて卵子を目指す。負けるな、負けるなと念じながら少しでも増援を送ろうと、トモキは尿道に残った精液をひり出すため腰を小刻みに前後させた。

マン肉をティッシュ代わりに使われる文香は、二人の精子が子宮内で争う鼓動を確かに感じ取った。

---

## 酩酊した鷺沢文香が若手芸人に輪 姦される話

著者名 猪熊夜離  
発行日 2022年7月4日  
Twitter @inokuma\_yoga

---

